

関係各位

福岡県米・麦・大豆づくり推進協議会
(事務局：J A 福岡中央会 担い手・営農サポートセンター)
(公 印 省 略)

営農情報 2

麦の収穫に向けた今後の管理について

1 月半ば以降、気象条件が平年より高温多日照傾向で推移しており、11月下旬播種の麦の出穂期は平年より8～11日早く、開花期では12日早くなっています。今後、気温が平年並で推移した場合、成熟期は平年より3～7日早く、大麦では5月10～15日頃、小麦では5月17～21日頃になると予想されます。

高品質麦の生産に向けて、収穫前の排水対策、雑草対策を行うとともに、適期収穫をお願いします。

1 麦種別の予想収穫期

大 麦・はだか麦 : 5月12日頃～
小麦（シロガネコムギ）：5月20日頃～

※収穫期は平年より非常に早く、おおむね前年産並みであると予想されます。

しかし、品種や播種期によって出穂期及び成熟期が異なるため、必ずほ場調査を行って各地域における収穫適期を判断してください。

2 排水対策

ほ場の排水溝を整備しましょう。特に、枕地の溝は排水口と繋がるように溝さらえを行い、降雨があった際でもほ場内の停滞水が速やかにほ場外に流出するようにしておきましょう。

3 雑草対策

収穫までに、雑草種子の混入により麦の品質低下が問題となるカラスノエンドウなどの雑草は必ず除去してください。

4 適期収穫

ほ場調査を十分に行い、倒伏程度の大きいほ場では、別集荷などの対策を実施してください。

前年産と同様に、収穫期が平年より極めて早くなることが予想されていますので、周到な収穫準備と荷受け計画をお願いします。

わらは焼却せずにすき込みましょう！

■わらすき込みの効果

- ① わらすき込みを繰り返すことで、腐植の低下を緩和できる。
- ② 根の伸長を促し、土壌が軟らかくなり、耕うん作業が容易になる。
- ③ 土壌の養分保持力が高まり、肥料の削減が期待できる。
- ④ 土壌が軟らかくなることで、クラスト（土膜）形成を軽減し、出芽が安定する。

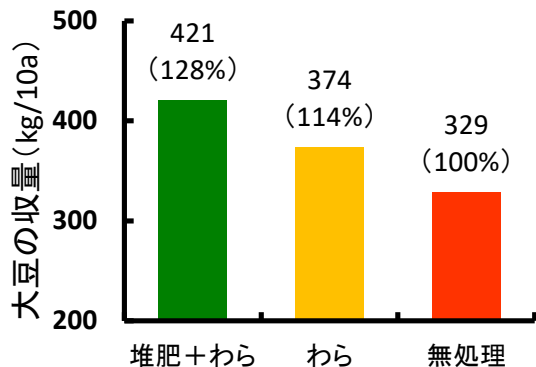


図 施用した有機物の違いによる大豆の収量差
※大豆－麦連作ほ場に5年連続で施用した場合
(福岡県農林業総合試験場)

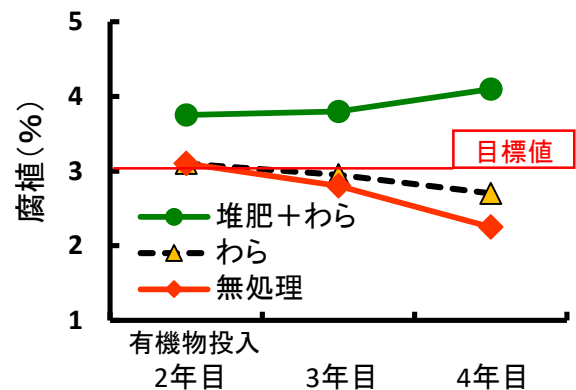


図 有機物の毎年投入による腐植の変化
(福岡県農林業総合試験場)

■麦わらすき込みの手順とポイント

《水稻作前》

- ① 代かき時での麦わらの浮き上がりを減らすため、麦わらを15cm以上の「長めにカット」し、ほ場一面、均一に散布する。
- ② 麦わら分解促進のため、麦わらすき込み開始後3年間、基肥を増やす（増肥量の目安は、すき込む麦わら100kg当たり窒素成分で0.5kg、ただし、前年夏作が大豆の場合は増肥しない）。
- ③ 耕うん（荒おこし）は、早めの時期に、通常より深く耕す。
- ④ 荒代かきは、トラクターの尾輪跡に水がたまる程度の極浅水（ベタかき）で行う（代かきは耕うんより浅く行う）。
- ⑤ 麦わらが分解される際、ガスが発生して、水稻の初期生育に影響を与えることがあるため、移植後2～3週目頃に適宜、水の入れかえ（強制落水）を行い、ガス抜きをする。その後、浅水管理で間断かん水を行い、莖数が確保され次第、中干しを行う。

《大豆作前》

- ① 播種ロールの回転に支障がないように麦わらを「細かくカット」し、ほ場一面、均一に散布する（特に、枕部分など）。
- ② プラウ耕（スタブルカルチ等）や、深めのロータリ耕により、土壌に混和する。
- ③ 耕起時の碎土、播種後の鎮圧をしっかり行い、出芽率を高める。

以上